九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヨハン・マッテゾンの音楽論 : 音の感覚的認識を通じた形而上的展開

松久保（米良）, ゆき

https://hdl.handle.net/2324/4784377

出版情報：九州大学, 2021, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式３）

氏　　名　：米良　ゆき

論 文 名　：ヨハン・マッテゾンの音楽論――音の感覚的認識を通じた形而上的展開――

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論は、ドイツ啓蒙主義を代表する音楽思想家ヨハン・マッテゾン（Johann Mattheson, 1681-1764）において、音楽を物理世界で感覚することが超越的存在の認識を導く、とする思想が前期から後期の生涯を通じた著作のなかで如何に理論化されているかを明らかにする。これまでの研究では、処女作『オーケストラ研究』(1721)をはじめ、前期の著作でマッテゾンが採用した方針は「感覚主義」と呼ばれてきた。オペラ歌手として幼少より活動したあと教会音楽家に転身したマッテゾンは、聖俗両方の音楽で聴覚への刺激から喚起される人間の心理的・情緒的な反応を重視した。従来の伝統では、音楽とは数学的な体系的学問として位置付けられているが、これは音楽についての原理である「数」とは、絶対的かつ普遍的な知識であるという考えに基づいている。対してマッテゾンは、音楽の存在意義を人間の情緒的な反応に求め、その善し悪しをめぐる判断を「感覚」や「趣味」といった相対的で主観的な領域へと開放した。特に初期のマッテゾンはこのような思想の理論化を図るため、イギリス経験主義のフランシス・ベーコンやジョン・ロックによる経験心理学的な哲学に傾倒したほか、フランス王立科学アカデミーの音響に関する科学的な研究を摂取している。しかしマッテゾンはフランソワ・ド・ラ・モット・ル・ヴァイエらの影響により、知識に拘泥することへの懐疑主義的な姿勢を生涯において崩さなかった。とりわけ前期には、理想的な紳士像として一般化していたギャラントムの美学を展開するなかで、衒学主義に陥ることの不適切さを説いている。以上のようにマッテゾンは、前期において音楽における新しい「知」のあり方を追求した（第一部)。

伝統的な数学的音楽観から離脱し、理性と感性という対立軸において示された新しい価値観は、自然と技術をめぐる問題にも波及する。音楽家が実践を積むことで培われる感性や判断力を信頼し、杓子定規の規則を厳格に守ることより優先させたマッテゾンは、またフーガなどの音楽形式に代表されるような、複数の声部や同時に鳴る沢山の音の響きから技巧を凝らして構成される和声（ハーモニー）には消極的であった。和声の規則はあまりに煩雑で聴衆にとって理解が難しく、実践と論理に齟齬が生じることも多かったため、かえって音楽のもつ豊かさを

矮小化させることに繋がるからである。一方でマッテゾンが最も評価したのは人間の心を打つ旋律（メロディー）であり、理想的な音楽のあり様を「高貴な単純」と表現した。この概念は新古典主義の文脈から援用したもので、オペラ論においては新古典主義の代表的論者であるゴットシェートらとの思想的な影響関係を指摘することができる（第二部）。

以上のような人間中心主義的、あるいは実践レベルの音楽の具体的問題から一転して、Phthongologia Systematica(1748)や Plus ultra(1752-55)といった著作を記した後期のマッテゾンは、聖書研究や形而上的な主題に熱心に取り組むようになった。その中心的主題とは「魂の不滅性」や「天上の音楽」といったもので、マッテゾンは音楽が人間の心理に及ぼす作用というより「音」という現象の非物質性から重さや形を持たない「霊的なもの」であるその不思議さに着眼している。さらにマッテゾンはこの「音」の形而上性を自らのキリスト教の信仰にも結びつけて語る（第三部）。以上のような思想の変化は、一見すれば晩年にかけて徐々に目線を地上から天界へと移すマッテゾンの関心が、人間の心情から神の認識へと方向転換しているようにもみえる。しかし実際には、後期における神的世界への理論化のための必然性だけでなく、根本的な部分で経験論や懐疑主義と共鳴するものであった。つまりマッテゾンはその生涯にわたる著作において徹底的に懐疑主義・経験論を突き詰めることによって、形而上的な世界の認識の可能な限りの論理的な確かさを担保しようとしているのである。